

# 米国海外教育研修の効果に関する一考察

～ 国際理解教育の意識育成の視点から ～

中林忠輔、星野常夫、長谷川雅枝、千葉聡子、萩原敏行、  
高橋克己、手嶋將博、藤原正光

( 文教大学教育学部 )

Research on the Effect of Overseas Educational Training in the U.S. :  
From the Viewpoint of Consciousness Training  
of International Understanding Education

NAKABAYASHI TADAO, HOSHINO TSUNEO, HASEGAWA MASAE,  
CHIBA AKIKO, HAGIWARA TOSHIYUKI, TAKAHASHI KATSUMI,  
TEJIMA MASAHIRO, FUJIHARA MASAMITU

( Faculty of Education, Bunkyo University )

## 要 旨

文教大学で平成2年に米国学校教育研修が始まり、15年を経過した。本研修は参加者の生き方や教育観等に少なからず影響を及ぼしていると思われる。そこで、本研究では、卒業生を対象にアンケート調査を実施し、米国学校教育研修の効果を「国際理解教育」の視点から考察・検証した。

### ・ 研究の目的

本研究は以下の内容について元研修参加者の意識調査を行うものである。

1. 米国教育研修が参加者の国際理解教育への意識形成にどのような効果を及ぼしたのかについて探る。
2. 双方の大学と教育委員会の今後の連携のあり方を考察する基礎情報とする。

### ・ 研究の方法

・ 文教大学卒業生のうち、過去の米国学校教育研修参加者279名を対象にアンケート調査を実施し、分析・考察。

### ・ 研究の内容

#### 1 調査研究の概要

- (1) 調査対象：平成2年～平成14年度の参加者279名。
- (2) 調査期間：平成16年9月10日～9月24日(2週間)。  
8月末より順次、郵送方式によりアンケート配布、9月30日までに返送されて来たものを回収・採用。

#### 2 回答者の属性に関する分析・考察

今回の調査で回答を得られたのは、100名、そのうち有効数値は85名である。

・自由研究

(1) 研修年度別の回答率

研修年度別回答者数は図0-1の通りである。

(2) 回答者の男女比

男女の回答率は、男性2.4%、女性97.6%であった。

(3) 現在の職業

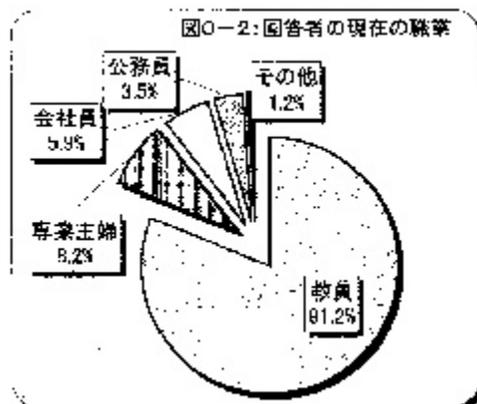
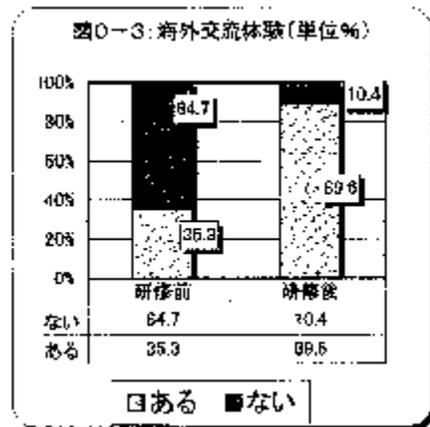
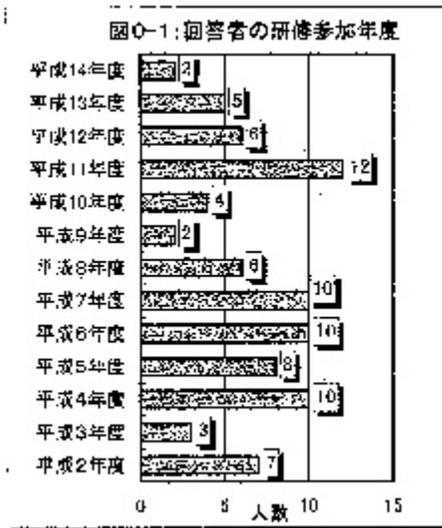
現在の職業は、図0-2に示すとおり、教員が81.2%であった。校種別では、小学校84.1%、中学校7.2%、高校1.4%、養護学校5.8%となっており、圧倒的に小学校教員が多い。非教員のうち、会社員と公務員を合わせると約1割いるが、その内訳を見ると、「教育関係の職種」に従事している者が22人中11人と50%を占めている。

(4) 研修前後での海外交流体験の変化

海外での交流体験の有無は、図0-3に示すとおり、研修前の35.3%に対して、研修後では、89.6%と大幅に増加している。すなわち、米国教育研修への参加をきっかけに、回答者の海外や異文化への関心が急激に高くなっていることが窺える。

また、研修後の海外体験者のうち、体験回数は2回が85.5%、3回が69.6%とリピーターが多い。

研修後の海外体験のとしての渡航目的は「観光」が大半であるが、全体で15.9%の者が「(米国教育研修以外の)研修」、さらに、7%の者が「留学」をあらたに体験していることが分かる。

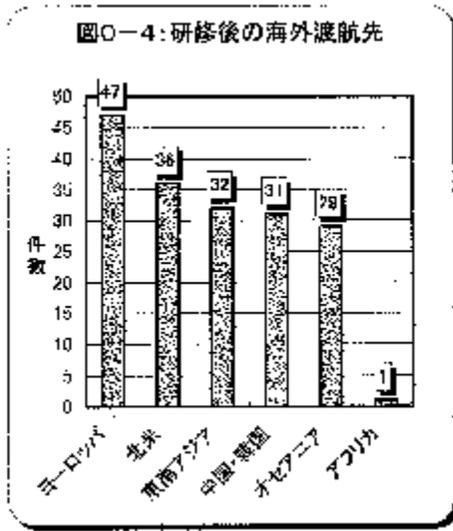


(5) 渡航先の傾向

さらに、複数回答(3つまで)で研修後に行った渡航先を質問したところ、結果は図0-4のようになった。

最も多かったのはヨーロッパで47件、以下、研修で経験した米国を含む北米36件、東南アジア32件、東アジアである中国・韓国31件、オセアニアが29件、アフリカ1件と、中南米やアフリカを除くとかなりの件数の渡航経験があることがわかる。

このような外国や異文化に対する興味喚起、海外交流体験への志向性の育成といったことも、米国教育研修による大きな効果と考えられよう。



・ 調査結果の概要と考察

「回答者の属性」に続いて、国際理解教育の意識に関する設問は、現在教員であるなしに関係なく参加者全員に共通の質問群である「 」と、教員と非教員とで質問項目が一部異なる「 」に分かれて設定されている。

まず では、「米国海外教育研修中の出来事」として、国際理解教育に関わる「過去の体験」について以下のような質問を行った。

質問 - 海外教育研修後の諸外国の文化への関心の変化

ここでは、海外教育研修を経験した後、諸外国の文化への関心はどう変化したかについて、「高くなった」「同じ」「低くなった」のいずれか選択による回答を得た。

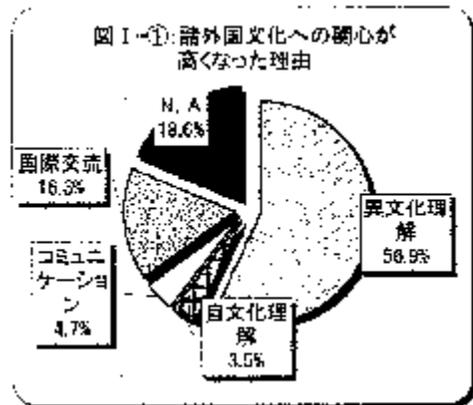
結果は回答者の81.4%が「高くなった」と答え、実体験を伴う海外研修の効果の大きさが窺えた。「属性」の箇所でも触れたが、参加者の64.7%は、この海外教育研修がはじめての海外（あるいは異文化）体験だったこともあって、彼らの意識に非常に強いインパクトを与えたといえる。参加者の89.6%がこの研修の後、観光や別の研修、留学などで更なる海外（異文化）体験をしているのはその大きな効果のひとつといえよう。

続けて、「高くなった」と答えた者にのみ、そう考える理由を記述回答させた結果が図 - のグラフである。

最も多かったのは「国による社会・文化の違いを実感した」「日本と違う文化に触れて大いに刺激を受け、価値観が広がった」といったような、『異文化理解が進んだ』ことに対する意見で、59.6%を占めている。

また、「積極的に国際交流したいという気持ちになった」「外国の人と積極的に交流するようになった」といった、『国際交流』に関する意見が2番目に多く16.3%、以下、「意思伝達や語学の重要性」などの『コミュニケーションの大切さ』に関するもの4.7%、「海外と比べることで日本文化を意識するようになった」という『自国文化理解』に関するもの3.5%と続いている。

参加者が挙げたこれらの『異文化理解』『国際交流』『コミュニケーション能力』『自国文化理解』といった項目は、すべて国際理解教育において重要とされる目標でもあり、海外教育研修がこうした国際理解教育の素養となる意識の涵養・発展に大きな役割を果たしていることが分かる。



質問 - 現地の小・中学校で行ったプレゼンテーションについて

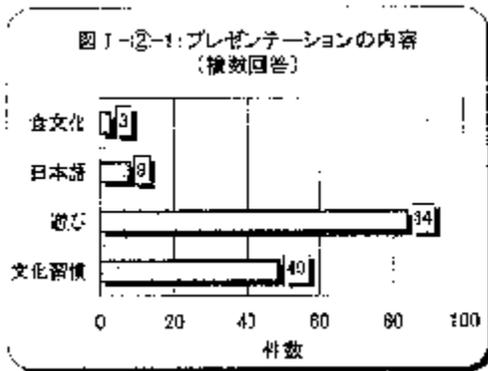
次に、研修地である米国メリーランド州チャールズ郡の小・中学校で、参加者が各自工夫を

凝らして行った「日本の文化・教育」に関するプレゼンテーションの内容と、行ってみた感想について質問をした。

まず、「どんな内容のプレゼンテーションであったか」について複数回答（4つまで）で回答させたところ、図 - 1のような結果になった。

最も件数が多かったのは日本の『遊び』に関するものであり、84件であった。

これには、例えば「折り紙」、「紙芝居」、「あやとり」、「(コマ・竹とんぼ・メンコ・けん玉など)日本のおもちゃの紹介」などが該当し、中には「日本のアニメ(ドラえもん)を使って、日本の小学生の生活ぶりの説明」というものも含まれている(注:マンガ・アニメを用いたものは、便宜的に「娯楽」という括りと考えて『遊び』に含めた)。



これらの中で最も多かったのが「折り紙」で、『遊び』に該当する84件中、半分以上の48件が「折り紙」であった。いわゆる紙の模型(ペーパークラフト)とは違う、美しい和紙(千代紙)を用いて作る「折り紙」の雅やかさや繊細さに対し、参加者の多くが代表的な日本文化のひとつとして意識していることが窺える。

次いで多かったのが「日本の歴史紹介」、「日本の音楽(歌・楽器など)の紹介」、「書道・茶道」、「俳句」、「(浴衣の着付けなど)日本の衣服について」、「(七夕など)年中行事」、「日本の住まい」など、『文化・習慣』に関する

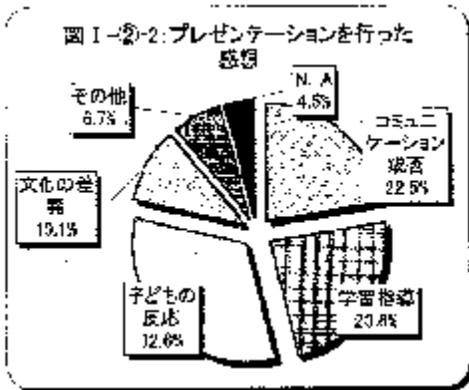
ものが49件であった。

これらと、実際に日本の料理を作って試食した『食文化』に関する内容を含めると、『異文化理解』の学習で最も用いられる教材である『3F(衣・食・祭/Fashion, Food, Festival)』に関係する項目の選択率が高いことも明らかになった。これらの項目は文化に対するステレオタイプなイメージを定着させかねないため、学習教材として選択する上での扱いには細心の注意が必要である。しかし、『異文化』に対して「自文化」を紹介する際に、やはり最も扱いやすいのは「外見上その『差異』が大きく、はっきり分かるもの」であるため、実際場面での使用頻度は高い。単に表面的な文化間の『差異』だけを強調して終わらず、その背景にあるより深い文化構造の探究まで含めた学習へと発展させて行くためには、教師自身の「文化」に対するイメージのもち方や教材化にあたっての視点の置き方などが課題となるであろう。

また、コミュニケーション的要素である『日本語に関する学習』を行ったのは8件であった。参加者自身の日本語に関する知識や指導技術、あるいは英語などの運用能力の問題もあるのかもしれないが、「ことば・言語」に関する授業は日本文化への関心の動機付け、双方向でのコミュニケーション意識の涵養に非常に重要な役割を果たすことを考えると、この数値はやや低いように思われる。今後、参加者にはこうした分野での魅力的なプレゼンテーションを企画・展開できる能力の向上が望まれる。

続いて、「プレゼンテーションの感想」についての自由記述した結果を分類したものが、図 - 2である。

最も多かった感想は、「現地の子どもたちが楽しみながら興味深く聞いてくれた」、「子どもたちの反応がよかったので自信に繋がった」などの『子どもの反応』に対するもので32.6%であった。

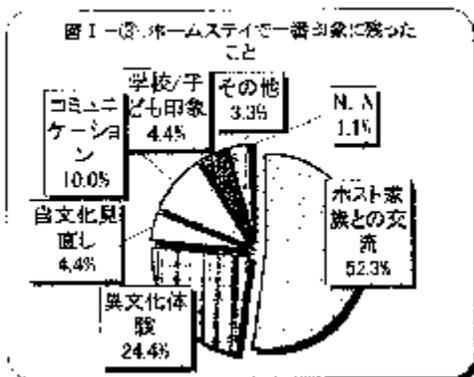


次いで、「指導案作成に苦心した」、「授業中に に気がついた」など、実際の授業や学習内容に関する『学習指導』関連が23.6%、「あまり英語は話せなかったが絵やジェスチャーなどで何とか意思が伝わってよかった」、「実演によって伝えられた」、「もう少し英語でうまく伝えられた」などの『コミュニケーションの成否』に関するものが22.5%とほぼ同数で続いている。

また、「日本のことが他国にあまり正しく伝わっていないのを感じた」、「実際に教えてみて、かえって日本の食文化に興味をもった」などの『文化の差異』を意識したことに关するものが10.1%であった。

質問 - ホームステイ中、一番印象に残っていること

続いて、国際交流という見地から、「ホームステイ中に最も印象に残っていること」について質問を試みた。その結果が図 - で



ある。

ここでは、『ホスト家族との交流』を挙げた参加者が52.3%と過半数に達した。やはり、1週間というごく短い期間ではあるが、寝食を共にし、いろいろと公私にわたって世話になったという経験が、参加者にとって強烈なインパクトを与えていることが分かる。

2番目に多かった感想は、「家庭内での役割分担の違い」、「買い物での品物の大きさなどの違い」、「家の造りの違い」、「衣・食・住など文化の違い」などの事象に驚いたという『異文化体験』に関するインパクトで、これら2つの意見だけで全体の76.7%と、4分の3を超えている。

これらの意見は、後者の『異文化体験』では、社会や文化における両国の大きな違いを意識している一方で、前者の『ホスト家族との交流』では、国や地域が違ってても人対人の交流の温かさ、大切さは同じであることを感じたことを示している。「住んでいる社会や文化が異なっても大事なことは人間同士の温かみのある交流」であることを参加者の多くが感じ取っているという点で、非常に興味深い結果であるといえよう。

また、『コミュニケーション』に関する感想として、お互いの言語に自信がなくても、相手に自分の意思を伝えようとする気持ちがあればボディランゲージやジェスチャー、筆記などあらゆる手段で相互に意思伝達をすることの楽しさや大切さに気付いた、という意見(10.0%)が多く見られた。

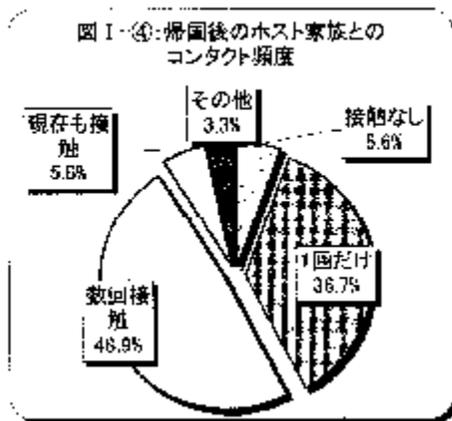
質問 - 帰国後のホームステイ家族との交流頻度

これらの結果を受けて、研修からの帰国後、ホームステイで交流したホストファミリーとのその後の交流頻度がどのようになっているのかについて、選択肢による回答を得た。その結果が図 - である。

さすがに『研修終了後、まったくコンタク

・自由研究

トを取ったことがない』という答えは少数(5.6%)で、「研修終了後、1回だけお礼の手紙や電子メールなどを書いたが、その後コンタクトがない」という『1回だけ』が36.7%、「研修終了後、数回はコンタクトを取り合っていたが、今はコンタクトがない」という『数回接触』が48.9%と、最も多い値を示している。ただし、現在もなお継続して、クリスマスカードなどでコンタクトを取っている、などの『現在も接触』という意見は5.6%にとどまり、帰国後最初のうちは交流を続けようとするものの、ことばの壁や多忙さなどの理由から徐々に疎遠になってしまい、やがて連絡が途絶えるというパターンがあることが分かる。

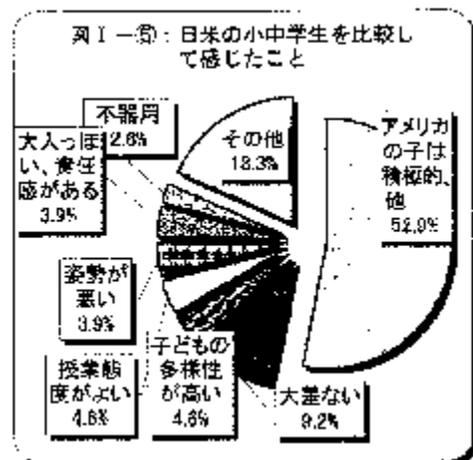


ここでは、国際交流の体験を一過性のもの  
で終らせずに、継続的な交流へと昇華することの難しさが表れていると考えられる。時間と労力をかけて海外に行き、現地の人びとや子どもたちとの交流を得たのに残念なことである。こうした「疎遠化」のパターンに陥らないようにすることも、今後の研修後のフォローとしての課題となるであろう。

質問 - 日米の小中学生を比較しての感想

- では、「日米の小中学生を比較して、感じたことを自由にご記入ください」と質問している。一人の回答者が0～3つの内容を指摘しており、合計では153の回答があった。自由記述であり本来数的な処理にはなじまないものであるが、ここでは内容的に類似すると思われる回答をいくつかパターン化してその比率を示す。

結果は以下の図に示すとおりである。まず圧倒的に多い回答パターンとして、「アメリカの子は積極的だ」という感想があげられる。なおこの中には、「自己表現がストレート」、「人なつこい」、「明るい」、「気さく」、「好奇心旺盛」、「のびのびしている」、「自由」、「おしゃれ」、「発想が豊か」等の回答が含まれる。



米国の学校を訪問した学生たちは当初、おそらく米国の子たちとうまくコミュニケーションをとれるのかと不安を抱えていたと思われる。ところが実際には思いの外、うち解けた感じだったことが印象深く記憶に残ったと考えられる。

次に多いのは「大差ない」という回答で、全体の9.2%を占める。このことは重要である。それだけ外国を身近なものとして実感したと解釈できる。学生たちは、大学の講義等で外

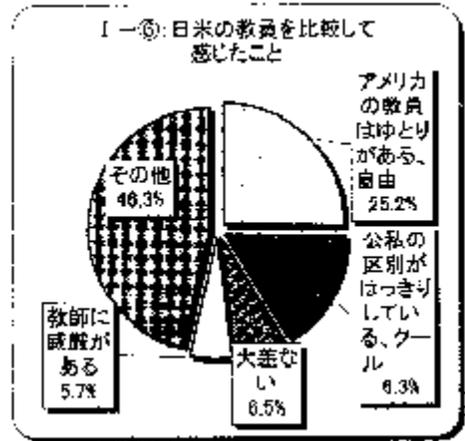
国の教育事情について、それなりの知識を身につけているだろうが、身近に捉えることはなかなか難しい。しかし、実際に行ってみて、「なんだ、そんなに変わらないじゃないか」と感じた。もちろんそのように答えた学生も、驚くべき違いを数多く発見したことであろう。しかし、「子どもは子ども」「かわいらしい」等、基本的なところでは変わらないということ強く実感して、外国を身近に感じたため、このような回答が多く現れたと思われる。

また、注目すべきは、「姿勢が悪い」「不器用」等の回答である。まず、これらの回答が示しているのは逆に言えば、「日本の子は器用」「日本の子は姿勢がよい」ということであり、これらの回答をした学生たちは、米国を鏡として日本を再発見したということになる。さらに言えば、これらの回答は「アメリカ万能」にとられることなく、日本のよさを再評価することにもつながるものである。実は従来の日米比較研究においてもこれらはしばしば指摘されてきたことであり、短期間ながら学生たちは鋭い観察眼をもって研修に臨んでいたことが窺える。

質問 - 日米の教員を比較しての感想

- では「日米の教員を比較して、感じたことを自由にご記入ください」と質問している。 - と同様、複数回答可であるため、合計で123の指摘がなされていたが、類似回答をパターン化し、その比率を示したものが以下の図である。

もっとも多く見られた回答パターンとしては、「アメリカの教員はゆとりがある、自由」という内容があげられ、およそ4分の1の回答がこのような内容を示していた。この中には、「授業態度がラフ」、「服装が派手」、「おしゃれ」というものも含まれる。米国の教員の悠々とした仕事ぶり、服装や化粧の自由さ等に強く印象づけられたようである。これらの記述の背後には、日本の教員に対する規制



の強さを念頭に「うらやましい」という感情が見え隠れするが、逆に「アメリカの教員の中にはマナーのよくない人がいる（授業中ガムをかみ、教卓に座る）」のように、日本の教員の「まじめさ」を誇りに思っている回答も含まれる。

次に多いのは、「公私の区別がはっきりしている」というもので（16.3%）内容的には、「帰宅時間が早い」等、勤務時間に関わるものや、「生活指導に淡泊だ」等、指導内容に関わるものがある。ここにも、「うらやましい」という感情と、「でも、それでいいのか。子どもとの関わりが薄いのでは...」という疑念とに揺れ動く気持ちが見て取れる。

また興味深い指摘は、「教師に威厳がある」というものである（5.7%）。「自由」というイメージと一見矛盾するようであるが、実はこれも従来の日米比較研究でしばしば指摘されてきたことである。ここにも、驚きと同時に、うらやましさを、疑念等、いくつもの感情が同居しているように思われる。

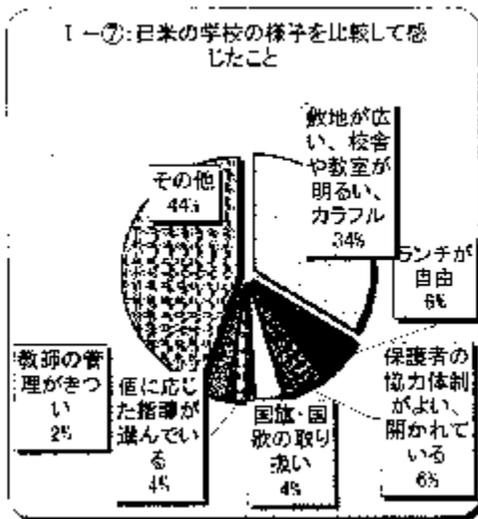
総じて、教員比較に関する回答は、大きく分散しており、内容をパターン化できない「その他」が半数近くを占めた。その中の例をいくつか挙げると、「社会的地位が低い」、「教員同士のコミュニケーションが少ない」、「子どもたちの個性を大切にしている」、「専門性がはっきりしている」、「女性が多い」等が

あった。

そしてパターン化できたとしても、内容的に肯定的な感情を含むものとやや否定的な感情をもつものが混在しており、学生たちは米国の教員と身近に接して、複雑な感情を抱いたようである。

質問 - 日米の学校の様子を比較した感想

- では「日米の学校の様子を比較して、感じたことを自由にご記入ください」と質問している。 - 、と同様、複数回答可であるため、合計で163の指摘がなされていたが、類似回答をパターン化し、その比率を示したものが以下の図である。



最も多かった回答パターンは、「敷地が広い、校舎や教室が明るい、カラフル」というもので、この中には「開放的」、「自由で明るい雰囲気」、「きれい」、「教室内の掲示がかわいらしい」等が含まれる。学生たちの多くは、米国の学校の敷地の広さ、校舎のきれいさ・明るさに強く印象づけられたようである。これらの感想には、「うらやましい」という感情が見え隠れするが、教室内の掲示が「一瞬、幼稚園かと思ったほどかわいらしい」ことについては、上記設問から窺えた「生活指導に淡

泊」「教師が権威的」という印象と矛盾するためか、強く印象に残ったようである。

次に「ランチが自由」という回答が多く見られたが、その内容の多くは日本のように教育的に配慮された給食がないことに対する批判的意味合いを含んでいた。

また「国旗・国歌の取り扱い」とは、「アメリカには各教室に国旗があり、愛国心を感じた」というような内容であり、とにかく日本との差異を強く意識したようである。

総じて、学校の様子に関する比較でも、回答内容は大きく分散しており、パターン化できないものが半数近く占めた。この中には、「不審者対策が進んでいる」、「学校選択の自由がある」等が含まれていた。

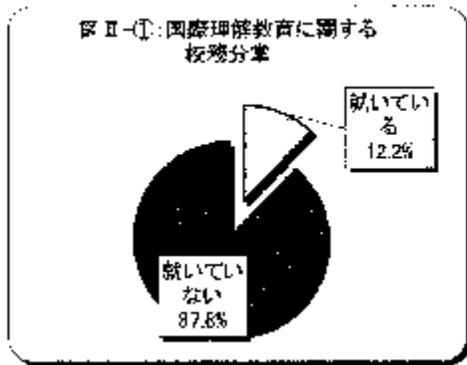
設問 - ~ は、いずれも日米を比較しての印象を質問した項目であり、これらの回答から、参加学生たちは、短期間ながら鋭い目で観察しており、非常に多くのことを感じ取っていたことが窺える。また羨望と同時に批判的思いをも伴う複雑な感情が見て取れる。そして何より、アメリカの学校を見るということが、自国の学校・教師の現状を深く再認識することにつながっていることがよく表れている。アメリカ研修の教育的効果の高さが如実に表れている質問項目といえるのではないだろうか。

質問 - 国際理解教育に関する校務の分掌

今回は、教員と非教員とで質問項目が一部異なる「 」について検討してみよう。 の質問群は、 とは異なり、回答者の「現在の」国際理解教育に対する関わり方や意識、およびその実践に関するものである。

まず、現在の勤務校で「国際理解教育」に関する分掌に所属しているか否か選択肢に対し回答を得た。この質問は、現在教職にある69人に対してのみ行われている。その結果が

図 - である。



ここで、『就いている』とした者は12.2%であった。引き続いて『いる』と答えた9人に、そこでの役割と、実際の仕事の内容について聞いてみたところ、役割については、7人から「国際理解教育の委員長」(2人)、「同副委員長」(5人)であるという回答を、仕事の内容については「全体的なまとめ」(2人)、「部分的なまとめ」(1人)、「各教科での学習に活かす」(1人)という回答をそれぞれ得た(なお、校内での役割と実際の仕事の内容についての項は、回答者の実数が少ないため参考意見とする)。

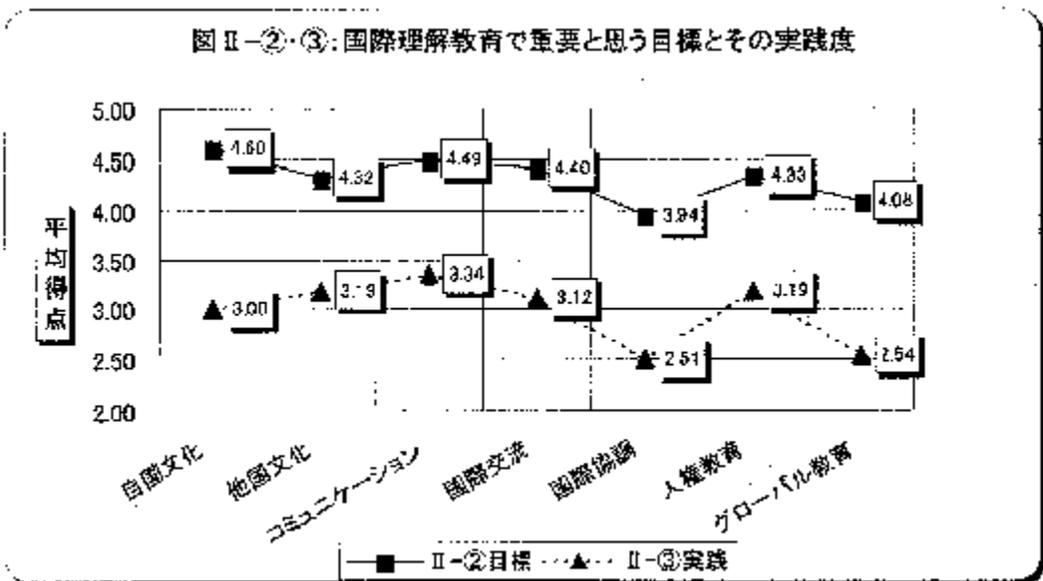
校務分掌は学校ごとの事情が絡むので、こ

の12.2%という割合が多いのか少ないのか判断に迷う部分であるが、現段階で国際理解教育に関係する役に就いていないからといってそれに対する意識が低いという見方は早急であろう。国際理解教育における、回答者の現在の意識がどのようなものであるのかについては、次の質問 - および で明らかにしていきたい。

質問 - 国際理解教育における目標に対する意識

今回は、学習指導要領などで示されている「国際理解教育」の目標から考えられる具体的な項目に対して、重要と思う度合いで、「1:重要でない」、「2:どちらかといえば重要でない」、「3:どちらともいえない」、「4:どちらかといえば重要」、「5:重要である」の5段階のうちから各項目毎に1つずつ選択させて、各項目に与えられた評価を重要度の高いほうから5点、4点...という形で得点化を試みた。

挙げられた各項目は「ア:自国文化教育」、「イ:他国文化理解」、「ウ:コミュニケーション能力の育成」、「エ:国際交流」、「オ:国際



## ・自由研究

協調』、「力：人権教育」、「キ：グローバル教育（地球市民としての教育）」の7項目であり、これらの各項目毎に平均得点を出したものが、以下の図 - ・ で、実線で示された - のグラフである。

これを見ると、各項目とも5点満点で4.60から3.94と非常に高い数値を示しており、回答者は各項目に対して、非常に高い重要度を感じていることが分かる。中でも、『他国文化』や『コミュニケーション』以上に、日本の社会のことや伝統文化・習慣などといった『自国文化』の学習の重要性を最も高く評価していることは興味深い結果である。

### 質問 - 国際理解教育における目標目標の実践度

引き続き、現在の勤務校で教育目標がどの程度実践されていると思うかを、同じ各項目について、それぞれ「1：全く実践されていない」、「2：どちらかといえば実践されていない」、「3：どちらともいえない」、「4：どちらかといえば実践されている」、「5：十分実践されている」の各段階を提示し、 - と同様に5段階評価による回答を得点化してみた。その結果がグラフの - の点線で示されたグラフである。これら2つの結果は、「目標」と「実践」という両者の比較が容易になるように同一のグラフ上に表記されている。

両者の結果を比較してみると、 - から - の全項目に対して1.13から1.60という平均得点の大きなマイナスを示しており、国際理解教育において重要と思う各項目に対し、勤務している学校現場では、なかなか満足していくほどの実践には至っていないということが浮き彫りとなった。

中でも、先述の - では最も平均得点が高かった『自国文化』（4.60）などは、実践という視点からみると、下から3番目の平均得点（3.00）になっていることが分かる。これ

は、「目標」と「実践」の得点の格差からみると、-1.60という全7項目中で最も大きな差を示しており、『自国文化』は大切であるという意識は大いにもってはいるけれども、実際に学習で扱うとなった場合に、それらをどんな内容でどのように教えたらよいのか迷っている様子が窺えよう。さらに、『国際協調』、『グローバル教育』といった項目に対する実践の相対的な低さもまた気になる部分である。他の項目はまだ、比較的身近な事象と結びつけて実感できる要素を含んでおり、教材化・学習実践としての具体的なイメージも湧きやすいのかもしれない。しかし、『国際的な協調』とか『地球市民の育成』などと言われると、とても遠い世界の出来事と感じてしまい、それらが大事なことであると分かっていても、実際に学習の中で取り上げるのには躊躇してしまうのかもしれない。

しかし、『国際協調』は、例えば小学校低学年であれば、まず友だちなどの身近な「他者」との協力の大切さから始めることもできるし、『グローバル教育』もまた、地域・国家・地球などの各レベルを構成する一員＝「市民」としての素養を育てていくものであるから、実はごく身近なところから始めることが可能な内容なのである。こうした「難しそう」「遠い世界の事で実感が湧かない」といった誤解を解き、国際理解教育における「目標」の重要度と、それに比して不完全燃焼感の残る「実践」とのギャップを埋めていくための教育や研修のあり方もまた、今後、日本の国際理解教育を発展させていくために早急に検討すべき大きな課題であるといえよう。

（執筆：長谷川、手嶋、高橋 / 編集：藤原、手嶋）